

第6回 JLPP 翻訳コンクール スペイン語部門講評

日本文学研究者、早稲田大学政治経済学術院教授
アルフレッド・ロペス

今回の JLPP 翻訳コンクールで初めてスペイン語部門が創設されました。第1回目なので様々な不安の要素がなかったわけではありませんが、応募者が多かったこととその中で質の高い作品が少なくなかったことを何よりうれしく思っています。日本文学が、話者数が多くて古い文化の伝統があるスペイン語圏で読者を得るきっかけになるのではないかと期待しています。

今回の課題作は小説部門が鹿島田真希の「波打ち際まで」、エッセイ・評論部門が向田邦子の「お辞儀」です。「お辞儀」はユーモアに満ちた作品で、まずそこに難しさがありました。なぜなら、異なる文化のユーモアを的確に伝えるのは簡単なことではないからです。その上、さまざまな社会関係が描かれていて、特に親子関係にまつわる文字面に現れない繊細な感情が含まれており、応募者の皆さんは大変苦労されたことでしょう。

しかしながら、もう一つの課題である鹿島田真希の作品のほうが翻訳に難しさがあったのではないかと思います。内容以上に文体面の難解さが存在するからです。例えば、絶えず間接話法と直接話法、声に出す言葉と頭の中で考えるだけの言葉、過去と現在が混合されています。それに加えて、この作品で目立つのは日本語特有の時制です。例えば、過去の話をして現在形を使ったりするという特徴がありますが、スペイン語ではそのような表現はしません。

審査にあたっては、細部の正確さより全体の印象を大事にしました。スペイン語で文学作品として読めるものには高い評価を与え、スペイン語が不十分なもの、日常会話レベルでは良くて、文学的なレベルに達していないものはマイナス評価にしました。

最優秀賞のエドワルド・ロペス・エレロ氏のスペイン語は非常にきれいで、十分に文学的なレベルに達していると思われます。細かいミスがないわけではありませんが、正確な表現が多く、場合によっては逐語訳を離れてより生き生きしたスペイン語になっています。特に鹿島田真希の作品の会話の部分（間接・直接話法、話す・考える）では、見事な手際を見せています。

優秀賞の佐野由季氏の「お辞儀」の翻訳は優れていて、ごく自然なスペイン語で原文の繊細な感情と訳しにくいユーモアを見事と言っていいほど伝えることに成功しています。私が読んだ中で一番完成度の高い訳文だと思います。それと比べると「波打ち際まで」は、間違いは多くありませんが、もう少し適切なスペイン語表現ができたなら、ちょっと惜しい気がしました。

モンセラト・サバテ・ビスカラ氏の翻訳はややミスが目立ちます。それにもかかわらずとても綺麗な、文学として十分読めるスペイン語で書かれているので、優秀賞にふさわしいと思います。